湘南の由来とエリアを探る
その１２

湘南発祥の地/大磯 －２

―鴫立庵・崇雪―

和田精二

図２ 鴫立庵の庭園に安置されている五智如来像の石仏

12-1 はじめに

今回は、大磯が湘南発祥の地という証拠を残してくれた大磯にとって大切な人物「崇雪（そうせつ）」について書きます。観光案内のガイドブック的な表現は可能でも、崇雪とは何者？なぜ大磯に草庵を結んだ？ なぜ石碑に「湘南」と刻んだ？ と考えていくと、短期間に考察し検証するにはなかなか難しい。そこで、崇雪の関連情報を取りまとめて整理することで、「崇雪」を知るための手掛かりにしたいと思います。

図１ 湘南の文字が刻まれた石碑（右側）を展示する大磯郷土資料館。海岸の厳しい環境を考慮して鴫立庵の碑はレプリカにしてある。

12-2 なぜ崇雪は西行寺建立を構想した？

前回述べたように、1664 年に小田原の俳人崇雪なる人物が大磯の鴫立沢に草庵を結び、そこに「湘南」の文字を刻んだ標石を建てました。この標石に刻まれた「著盡湘南清絶地」が大磯を湘南発祥の地としている所以であり、そのこと自身は湘南に興味のある人にとっては半ば常識化しつつあります。

崇雪が鴫立庵に石仏を安置したことや目的が西行寺建立にあったことも、観光リーフレット等を注意深く読めば見出せますし、五智如来像は今も鴫立庵に安置され、見学も可能です。

ところが、大変な重量の石仏５体を庵内に設置したり、西行寺の建立を構想していたという事実は、いかに西行に対する尊敬度が高くても、日常的な発想とは考え難く、個人的にも相当の資産がなければ不可能です。一体、崇雪とはいかなる人物だ

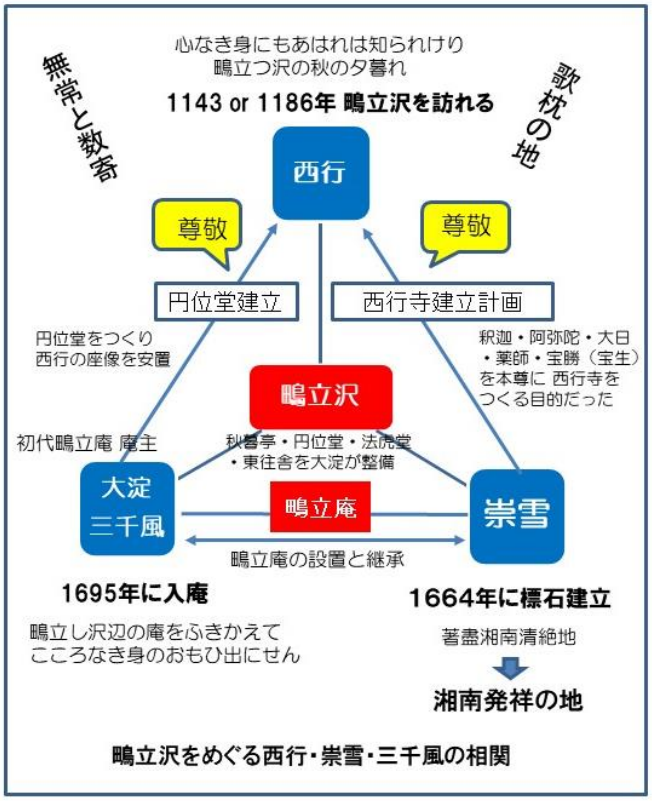

図３ 西行・崇雪・三千風による「鴫立沢相関図」（筆者作成）

ったのか、興味に駆られて調べていくと、博多、京都、小田原と拠点を移しながら、代々にわたり日本の近現代史に大きな足跡を残した外郎（ういろう）家のファミリーストーリーが浮かび上がって来ました。

３冊の書籍（「ういろう物語」山名美和子/2010、「ういろうにみる小田原」深野彰/2016、「ういろう」外郎まちこ/2016 ）が大変参考になりました。崇雪を主題に取り上げた本ではないので、崇雪についての疑問が解けた訳ではありませんが、外郎家についての知識が深まったことで、崇雪の輪郭がぼんやりと見えて来た気がします。結論として、崇雪を知るために崇雪に的を絞って深掘りするよりも、外郎家の主だった情報をとりまとめ整理した上で、崇雪を考えるきっかけづくりをする方が適切と考えることにしました。ついでですが、今後の湘南研究に役立ちそうな情報が多いので、長くなりますが記録しておこうと思います。

12-3 亡命して来た初祖陳外郎（ちんういろう）

図４ 現在の「ういろう」本店（小田原城に近い国道沿いにある八棟造りといわれる建築様式の建物）

まずは「陳外郎（ちんういろう）」について。「陳外郎」の名は、室町時代に京都で活躍した中国人の医師（すなわち崇雪の先祖）が代々名乗ったことに始まります。初祖の陳外郎「延祐」は、中国浙江省 台州出身の人物で、中国の元王朝で大医院・礼部員外郎を務めた高級官僚でした。朱元璋（洪武帝）が元朝を倒し、明を建国した 1368 年、明朝に仕えることを拒んで日本（博多）に亡命しています。「陳外郎」は官職名の「員外郎」から

図５ 外郎家の系譜（「ういろう物語」の年表を元に作成）

とった名前のようです。「延祐」は占い術と医術に優れていたので、３代将軍足利義満から何度も上洛を招請されましたが、「延祐」はそれを固く断っています。

注）外郎家は、６代以降「陳外郎」を「外郎」と名乗っていますので、以降の文章中では「外郎」に統一表記します。

12-4 外郎（ういろう）家が遺した文化遺産

図６ 現在販売されている 薬の「ういろう」

「延祐」の子で外郎家２代の「宗奇」は、室町幕府３代将軍・足利義満の招きに応じて京へ移住、公家と同格で重用されました。すぐれた外交知識と交渉力を持っていたため、医薬業の他、朝廷御典医、外国使節接待役、禁裏・幕府の諸制度顧問など、様々な政治的役割を担っていました。

「宗奇」は、朝廷の命で明国へ渡り、家伝の薬「霊宝丹（れっぽうたん・れいほうたん）」の処方を持ち帰り、日本における製造を可能にしています。「霊宝丹」は銀色の丸薬ですが、消化器系への効能が顕著なため、後小松天皇から「透頂香（とうちんこう）」の名を授かっています。一般向けには名称を「ういろう」としましたが、現存する日本最古の薬として 600 年以上も製造・販売が継続され、現在に至っています。

図７ 「お菓子のういろう」のパッケージに「ういろうの本舗は、全国で小田原市に唯１軒あるのみです。」と記されている。

一方で、「宗奇」は外交官として明国や朝鮮からの公式使節の接待を担当しましたが、その国賓を接待するための菓子として創作したのが、黒糖と米粉を使った棹菓子「ういろう」です。薬と同じ位に高価だった黒砂糖を使った菓子は官中で評判となり、外郎家がつくったため「ういろう」と呼ばれるようになりました。製法が簡単なため、砂糖が一般にまで普及した江戸時代以降、各地方で米粉を蒸した類似の菓子がつくられるようになり、地域物産として広まっていきました。小田原以外に、名古屋の「青柳ういろう」「大須ういろ」、伊勢の「虎屋ういろ」、京都の「五建ういろ」等々がありますが、いずれも小田原ういろうに起源があります。

もうひとつ、２代「宗奇」が遺した文化遺産に京都祇園祭の山鉾（やまほこ/やまぼこ）・蟷螂（とうろう/カマキリのこと）をのせた「蟷螂山」があります。南北朝時代に足利義詮軍に挑んで戦死した地元の公卿の戦いぶりを中国の故事で勇者と讃えるカマキリになぞらえたことが起源です。1868 年の大火で焼失しましたが、昭和 56 年に再興されました。

図８ 宗奇が建立した京都祇園祭山鉾「蟷螂山（とうろうやま）」

図９ 歌舞伎「外郎売」を演じる 12 代目市川團十郎（左）

最後に「武具馬具 ぶぐばぐ 三ぶぐばぐ、あわせて　武具馬具具　六ぶくばぐ‥‥」の早口長口上で有名な歌舞伎の市川家十八番「外郎売」。享保のころ、歌舞伎俳優２代目市川團十郎が痰と咳の持病で舞台に立っても口上が言えず、役者をあきらめかけていた時、俳諧仲間であった外郎家の隠居（13 代「相治」）から「ういろう」の丸薬をすすめられて病が治ったことから、そのお礼に創作されたのが「外郎売」です。

演目に「曽我」とあるように曽我兄弟の仇討物語です。世間で評判の外郎売の口上が聞きたくて、大磯の遊郭において花魁が外郎売に扮した曽我五郎時致を工藤の席に招き入れる場面では、舞台に團十郎があでやかな外郎売の姿で登場、口上を見

事な早口でよどみなく述べ立てると、大向こうから「成田屋！」と声がかかりました。こうして、この演目には大磯も登場します。外郎家と大磯の縁は崇雪だけではなかったようです。

12-5 小田原へ移住した外郎家

図 10 現在の小田原城

地方豪族の大森氏が基盤をつくった小田原の城下町は、大森氏に取って代わった北条氏によって関東を代表する城下町に発展しました。父北条早雲の小田原にかける壮大な町づくりビジョンを忠実に実行した北条２代氏綱こそ、小田原の城下町を本格的に構築した最初の小田原城主といわれています。

氏綱以降も早雲の描いた小田原の町づくりを、京や駿府から職人や商人を呼び寄せることで、商工業の基盤を構築していきました。その中に外郎家の医薬業があったわけです。

戦国時代、どこの地方大名も、自分の支配する領地への京文化の導入を熱心に行いました。北条氏も同様に、和歌、連歌、漢学、絵画、禅宗など幅広く京文化を伝える公家や連歌師、禅僧を小田原に招いてそれらの文化を吸収し、小田原に根づかせる努力をしています。小京都といわれる地域が全国にありますが、小京都とは京に似せた町並みや文化を領主が好み、同じようにつくらせた町のことです。2014 年、小田原城の北側から京にも類を見ない見事な庭園跡が出土しましたが、応仁の乱で荒廃した京をしのぐ斬新な文化の一端が、当時の小田原に花開いていたことが窺えます。

12-6 北条氏が外郎を招いた理由とは？

５ 代「定治」が京から小田原への移住を決意した背景を、深野彰氏が的確に説明されていますので、そのまま引用します。

『 ２ 人（北条早雲と定治）を結びつけるもっとも重要な観点は、小田原と京とのつながりである。戦国時代は地方割拠の時代とイメージされているが、決して日本の政治・文化の中枢としての京の存在意義が失われたわけではない。

地方で割拠する者は、自らの権威づけのために京の文化的背景を身につけ、京の都人との人脈を確保せねばならなかった。地方割拠の時代だからこそ、宗瑞（早雲）は京とのパイプ役の必要性を強く意識したにちがいない。そのような役割を担うためには、一介の商人では役に立たず、公家自身か公家の家にも出入りできるような格式を備えた家柄でなければならないと考えた。その点、外郎家は打ってつけの存在であった。

図 11 北条氏綱肖像画

外郎家は単なる商人ではない。医薬の専門家として朝廷や室町幕府へ自由に出入りし、公家たちと深い交流を結ぶという名家となっていた。さらに有力広域主任として全国から集まる情報をいち早く入手できる立場でもあった。

そのような外郎家を小田原へ呼び寄せた時点から、宗瑞は外郎家に単なる医薬業としての役割だけでなく、京や地方の有力者とのつながりを開拓する外交官という役割も期待したと思われる。宗瑞が外交こそ領国経営にとってもっとも重要な機能であると考えていたとすれば、外郎家の小田原招聘は、有能な領主であった宗瑞らしい、のちの北条家を支えるための布石であったとも言える。

外郎家に伝わる歴史によると、５代定治は北条家の期待に応えてたびたび京に上がって、朝廷や幕府、公家との取次ぎを行っている。そして 1523 年には、定治は右京亮に任ぜられている。外郎家は北条家から小田原城南側の街道筋に宅地を与えられ、八棟造り（やつむねづくり）の豪壮な屋敷を建てた。1539

年、定治は武州河越（現・川越市）三三郷の今成郷（旧今成村）を与えられて代官に任ぜられている。

外郎家は、商人としてだけではなく、北条家の家臣として部門に列したわけである。定治のあと、外郎家は、6 代家治、7 代吉治と続いた。1576 年には、吉治宛てに丸薬販売に関する独占販売権を与える花押付きの証文が発行されている。吉治の後は８代光治が代を継いでいるが、武州高幡（現・東京都日野市高幡）、上野新田（現・群馬県太田市）、上州舘林（現・群馬県館林市）と領地が加増された。』

『「ういろう」にみる小田原』深野彰　2016

最後に登場する８代「光治」の次男が「崇雪」です。博多、京、小田原へと展開する外郎家の歴史の延長上に、いよいよ崇雪の人物像が浮かび上がって来たように感じられます。

図 12 関東大震災前の「外郎」店舗の八棟造り

12-7 いよいよ崇雪について考える

以上を頭に置いて崇雪について考えてみたいと思います。ここで、前述した外郎まちこ氏の「ういろう」の文章を引用します（一部省略）。文中の宗雪は崇雪を指します

『小田原に移ってから何代か後の江戸時代、先祖の 1 人に才能豊かな若者がいたという。 彼は詩歌に秀で、宗教心も篤く、薬の製法を継ぐのにも十分な能力を持っていた。しかし、理由は不明だが、後継ぎと認められなかった。そのため、彼は分家を許さなかった当時の家の慣習に従って僧となり、家を離れた。

僧となった宗雪は現在の神奈川県大磯町に移り住んだ。場所は、平安末期から鎌倉時代初期のころの歌人西行法師が「心なき 身にもあはれは 知られけり しぎたつ沢の 秋の夕ぐれ」と和歌に詠んだ地であったそうだ。「しぎ」は鳥の「鴫」のことだが、当時そこは寂莫とした場所だったので、「死木」つまり墓を示す塔婆にかけて詠んだ、と考えている人もいるようだ。宗雪はそこに「鴫立庵」と名付けて庵を結んだ。彼はそこで俳句を詠み、句会を開き、また僧として生涯を終えたという。

宗雪は、行くことを許されない遠い先祖の故郷、漢詩などから想像するしかなかったであろう、代々の言い伝えの地に思いを馳せていた、と聞いている。私は、宗雪が彫ったとされる、その碑文のことを知らなかった。訪ねてみて初めて知った時、殆ど摩耗して読めなくなっている文字に懐古の念を感じ、さらには豊かな才能がありながら跡継ぎになれなかった、つまり製薬に携われないが故に家を離れなければならなかったことを思い、胸が締め付けられるような気持ちになった。一子相伝、何という冷たい決め方だろう。今となれば、そうしなければならなかった理由が分からない訳ではない。封建時代の考え方では、致し方ないことだった。それにしても、何ともやるせない思いがする。

図 13 「著盡湘南清絶地…」の標石に刻まれた「崇雪」の文字

ところで、宗雪が大磯において湘江になぞらえたのはどの流れだったのだろう。何処を見て先祖の地を偲んだのだろうか。庵の前を、黒潮の打ち寄せる海に向かって流れている沢だったのか、大磯町を流れる花水川だったのか、はたまた、少し遠いが、平塚の相模川だったのか。最近まで私は川幅が広く漢詩に出てくる湘江を連想させるような流れだと思っていたからだ。しかし今は、宗雪が中国の湘江になぞらえたのは現実に存在する沢や川や海ではなかったかもしれない、と考えている。

西行法師が詠っているように、この世が無常で夢、幻の世界だと思っているから、多少のことでは心を動かされない僧の自

分であってさえ、この黄昏時の柔らかな光の中、ねぐらに帰る鳥が黒い影となり、音もなく飛び去っていくのを、静かで、薄墨を引いたような流れの水辺に立って、１人見送っている時、言い知れぬ哀愁の思いがひしひしと心に湧き上がって来る。（これは私の勝手な想像だが）それとほぼ同じ情景を宗雪も目にしたのであろう。その美しさに胸が痛くなるような凛とした夕暮れ時の景観に、彼は心象にある「湘南」の風景を重ね合わせたのではないだろうか。もしかしたら、彼はそんな情景を求めて大磯に行きついたのかも知れない。宗雪の墓は鴫立庵の片隅にポツンと立っていた。仙人の修行はしていなくとも、彼もまた仙人のように孤高の人生を歩んだに違いない。そして、この話は先祖が湘江の南にある土地で暮らした、という言い伝えを宗雪が聞いて憧れを持っていたことが原因になった、と私は考えている。』　「ういろう」外郎まちこ 2016

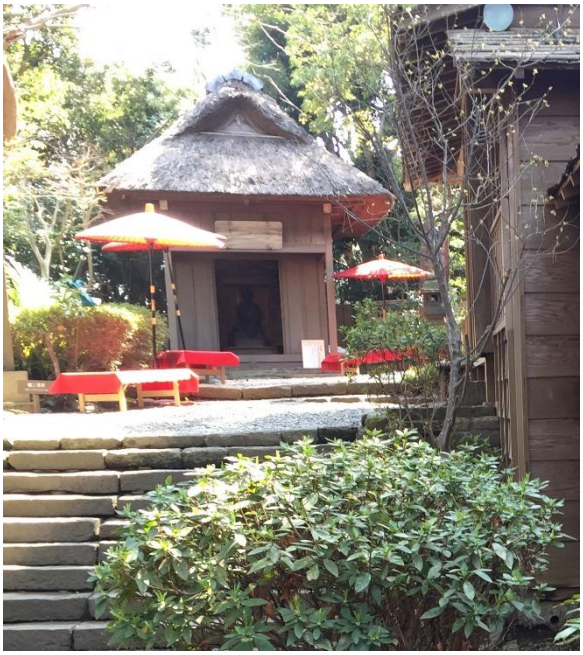

図 14 大磯西行祭当日の円位堂（内部に西行の座像）

12-8 何が分かって、何が分からないのか？

日本には藤原貴族文化と武家文化をつなぐ、中国における宋の文化に当たるものがありませんでした。そこに生じたのは、武士の世界の栄枯盛衰。あの世もこの世も有為転変をくりかえす「無常」であるというおぼえも広がり、遁世あるいは出家を志す者もあとを断たなかったといいます。遊行上人の様に外を歩く僧が増えて来ると、やがて僧侶でもないのに「遊行」という生き方をまねる人々が出現、現実社会の権力や財産を捨てて、山裾に庵を結んだり、旅を住処にしたりすることによって仏の道に近づこうとしたわけです。やがて、仏の道というよりも、世をはかなむ生き様を美意識として高めていくような人も出て来ます。その代表的な人物が、能因法師であり、西行。その西行を遊行の先駆者として尊敬する一遍、世阿弥、松尾芭蕉。「にほんとニッポン」松岡正剛　2014

さて、崇雪についての解釈ですが、五智如来像を運んで西行寺を建立しようとした強い意志の背景に、こうした西行イズムが大きく働いていたと考えられそうです。外郎家を出ざるを得なかったことがきっかけとなっても、それが彼の行動の主因となったと考えるにはやや無理があるように思えます。家を離れ、家族と別れ、庵を結ぶ理由の主因は、西行への傾倒、無常と数寄にあったと思えるのですが、これは勝手な想像です。

図 15 鴫立庵の円位堂に安置された西行の座像

次に、「湘南」を標石に刻んだ理由ですが、それを解き明かすための材料が殆どありません。1 代「延祐」の亡命が 1368 年、崇雪の鴫立庵建立が 1664 年。そこには 300 年の時が流れています。300 年を超えて望郷の思いを「著盡湘南清絶地」の文字に込めたのかどうか、いまひとつ分かりません。

12-9 崇雪という人物について

今回の調べで崇雪個人に関わる情報を少しだけ収集できました。今後の参考情報として以下に列記しておきます。

・崇雪は外郎家８代「光治」の次男として出生し、後に橋本伊右衛門と称した。橋本家に養子に出たものと推定される。

・崇雪は、家訓の「一子相伝」のために家業を継ぐことが出来ず外郎家を出ることになったと思われる。それが原因で橋本家の養子になった説や僧になった説があるが、記録がないため確認できない。
・崇雪が出家した記録はないが、初代「延祐」が博多で禅宗の僧（法名：台山宗敬）となって以降、４代まで半僧半俗で在家として生活をしていたという伝聞があることから、崇雪が出家したとしても不自然さはない。ただし、現段階で確認できていない。俳人にして僧侶であったというのは、良寛和尚等の事例があるので、この点については不自然さはない。

図 16 牧谿・瀟湘八景のうちの「漁村夕照図」

・鴫立庵で「俳句を詠み、句会を開き、また僧として生涯を終えた」とあるので、崇雪は鴫立庵が終の棲家だったことが窺える。「墓は鴫立庵の片隅にポツンと立っていた」とあるが、鴫立庵で崇雪の墓を確認できなかった。
・俳諧になじんでいた外郎家がスポンサーとして鴫立庵に対する援助を惜しまなかったという記述もあるが定かではない。

❖

■引用図表

図１：鴫立沢標石
大磯町郷土資料館の許可を得て撮影
図２： 鴫立庵 五智如来像
http://www.nem-shiteikanri.jp/shisetsu/shigitatsuan/history/index.html
図６：薬の「ういろう」
https://ja.wikipedia.org/wiki/ういろう_(薬品)
図８: 京都祇園祭「蟷螂山（とうろうやま）」
http://www.gionmatsuri.or.jp/yamahoko/toroyama.htm
図９：歌舞伎「外郎売」
https://www.kabuki.ne.jp/meikandb/omoide/actor/11
https://www.benricho.org/kotoba_lesson/Uirouri/shinkana.html
図 11: 北条氏綱肖像画
https://ja.wikipedia.org/wiki/北条氏綱
図 12：関東大震災前の「外郎」店舗の八棟造り
「ういろう物語」山名美和子

■引用文献、参考文献

ういろう物語　山名美和子　新人物往来社　2010
ういろうにみる小田原　深野彰 新評論　2016
ういろう　外郎まちこ　東京図書出版　2016
にほんとニッポン　松岡正剛　工作舎　2014